

## 日米の政治不安と経済

高成田亨（朝日新聞論説委員）

（同友会二〇〇四年七月例会講演）

こんには、高成田です。東京も暑いですが、ここも暑いですね。この間、オーストラリアに農業関係の取材に行ったときに、インドの記者と一緒にいました。その記者に、インドの気候を尋ねたら、「インドはスリーシーズンしかない」といって、「Hot, Hotter, Hottest」と言ったので、大笑いになりました。今年の猛暑が地球温暖化と関係があるのかどうかわかりませんが、温暖化が進めば、日本もそうなるのかもしれません。

暖かくなるだけなら良いのですが、マラリアを媒介するハマダラカがどんどん北上してきており、このまま行くと二一〇〇年には西日本までマラリア感染の可能性がある地域になるそうで、こうなると温暖化も人ごとではないようです。

論説委員というのは社説を書くのが主な仕事で、朝日新聞には三十人くらいおります。その中で私はアメリカ全般、そして国際経済、経済全般というところを担当しています。ワシントン勤務が二度あり、いわゆるワシントンウォッチャーの一人だと思っていますけれども、いろいろな問題にかかわっているので、まじめなウォッチャーではありません。



ただワシントンウォッチャーの一人として、特別な経験を二つしております。一つは、九・一一のとき、ワシントン勤務でしたが、たまたまニューヨークの郊外におり、ハドソン川の向かい側にあるワールド・トレード・センターのビルが煙に包まれているのを見ました。現場のあるマンハッタン島に入ろうとしたのですけれども、橋のところで交通が遮断されて入れない。ワシントンに帰ろうとしたんですけれども、これも交通規制でままたまならない。ということ、ハドソン川の向かい側のホテルに陣取って、目の前に、いつでもちよっとありますけれども、ビルが崩れ落ちるのを見ながら原稿を書きました。

もう一つの経験は、アメリカの現職大統領に会うことは難しいのですが、二〇〇二年二月に今のブッシュ大統領にインタビューする機会を得ました。他のアジアの人と四人で大統領にインタビューをしたのですが、そのときのブッシュ大統領の印象というのは、「信念の人」という感じがしました。

韓国の記者が三回も北朝鮮問題を聞いた。それにブッシュさんは、あの三八度線の向こう側で多くの人たちが苦しんでいる状況を放置しちゃいけないと熱弁を振るうんですね。その熱弁の振るい方は、政治家の政治的な発言以上のものだと思います。ああいう国があっちゃいけないんだというものすごい強い信念ですね。普通の政治家だったら、ああいう非民主的な国は国際的な圧力と包囲網によって改善させていくなどと答えると思うのですが、ちょっとびっくりしました。この人は本気で攻めるつもりなんだと思いました。

私は、日本についてどう思いますかという質問をしました。それに対して大統領は小泉首相について答えたのですが、その答えは、「私は小泉さんが大好きです。とっても話しやすい人で、私の友達だ」(I like him a lot. He is an easy man to talk with and he is my friend)というものでした。その発言の録音テープを職場で聞いていたら、スタッフの一人が、情けないと言う。なんで情けないのかと聞いたら、今どき自分が好きだという人を、幼稚園の子どもだって「I like him a lot」なんて言わない、もっと気のきいたことを言うというのです。語彙が貧困であるということ、なるほどそういうものかと思いました。もっとも、そのときに日本人の同僚が「それは高成田さんの英語力に合わせただけだ」と言いまして、これも凶星だと思いました。

そろそろ本題に移りたいと思います。日本とアメリカは、いま景気の回復期にあると思うのですが、そのせいかどうか、両国とも政権の箍たがが緩んできているように思えます。こつしたことを考えてみたいと思います。

## 日本の景気回復は本物か

最初に日本の景気回復は本物かどうか、考えてみたいと思います。この間、前大蔵大

臣の塩川正十郎さんが我々の部屋に来られて、いろいろな話をしました。その中で、塩川さんの地元、東大阪の中小企業の景気が回復していると言っていました。去年ぐらいから、大企業を中心に景気が回復してきているが、なかなか地方の中小企業のレベルまでは浸透していないと言われてきました。しかし、東大阪というところで、いや、儲かっていますよというような話を聞くと、少しずつでしようけれども、地域的にも業種的にも、景気回復に広がりが出てきているのかなという感じがします。

私がいつも定点観測しているのは、大田区の金型工場で、いつも同じ経営者に話を聞いています。最近、工場に伺ったところ、「仕事は増えてきているが、単価がまだまだ上がらない」と嘆いていました。金型というのは、ご承知と思いますけれども、これから生産する製品にあわせて作るもので、その金型の仕事が増えてくれば、その後、生産が増えることになります。その意味で金型は景気の先行指標になると言えます。金型の仕事が増えていることから、経済に活気が出てきていると判断できます。

ただ単価が上がらないというのは深刻です。というのは、この会社が属している金型組合は五年前まで二十社ぐらいあったんですが、今は七社しかない。つまり、三分の一に企業数が減っているのですが、それでもまだ単価が上がらない、仕事を獲得するため値段の叩き合いになってということなのです。

それから、あまり暑いものですから、ビッグカメラという電化製品の量販店に、クーラーは売れているかと尋ねたところ、売り上げは昨年と比べて、クーラーは三倍、扇風機は二倍で、それに薄型テレビは四倍売れているということでした。ただ暑い影響だけでなく、オリンピック需要なのかもしれません、まだまだ高価な薄型テレビが売れていることをみると、消費者の購買力も少しずつ増えてきているように思います。

こうした事例を重ねると、景気回復の足取りが確かに強くなっているように思います。もっとも「デフレ経済」とか「失われた十年」とか言われてきた長期的な不況期から脱出できたかと言うと、それにはまだ早いという感じがします。

というのは、この長期不況は「バランスシート不況」とも言われていて、土地や株の

値段が下がり、資産の目減りで担保不足となり、それが経済活動を鈍らせているというものだからです。株価にしても地価にしても、まだ十分には戻っていないと思います。また後ほど話ししますけれども、金融面にもまだ不安は残っていて、デフレから脱却するということには、少し早いという気がします。

## デフレからの脱却は次の大波

そういう意味では、今は景気の回復サイクルにあります。それが終わり一度後退のサイクルを経て、次の回復サイクルぐらいにならないと、デフレからの脱却と言うのは無理ではないかと私は思っています。

景気のサイクルをみると、一九八八年の第4四半期から一九九一年の第1四半期まで四年三カ月の成長期（好況）がありました。これがバブル成長と言われた時期です。その後、一九九三年の第4四半期から一九九七年の第2四半期までの三年九カ月の成長期があつて、これは山一ショックなどで崩れていきます。そして、二〇〇二年の第1四半期からいまも続いている成長サイクルにいるわけです、そろそろ二年半になります。今回は、前回のサイクルに比べると勢いが強いと言われています。とくに、その景気の牽引役の電機・機械などが非常に力強いと言われています。

しかし、日本の景気のサイクルは平均三年弱ということですから、来年の前半ないし後半ぐらいから下降サイクルに入ってきてもおかしくはありません。そうになると、このサイクルのもとでデフレ経済から脱却したというのは、やはり早いのかなということになります。ご承知のようにデジタル放送が広がり始めており、二〇〇一年には、現在のアナログ放送がデジタル放送に完全に切り替えるということで、だんだん切り替え需要が高まってくると思います。二〇一〇年ごろからの次の成長サイクルは、デジタルを軸に大きな好況の波が来るだろうと予想します。

今の段階では、景気回復は、デフレから脱却できるほどの本物だということにはちょっと早く、デフレからの脱却には次の大波まで待たねばならないだろうと思います。

一方、アメリカ経済の方ですが、二〇〇〇年ぐらいからITバブルの崩壊ということ  
で、IT（情報技術）企業が倒れたけれども、昨年ぐらいから回復期に入っています。  
しかし、この回復も来年ぐらいから下降するだろうと見られています。理由の一つはア  
メリカの大統領選挙で、選挙前は金融を緩めるなどの政策が働いて景気が上向きになる  
が、選挙が終わると政策的な景気刺激策がなくなるということがあります。

さらにアメリカは六月末に金利を上げております。景気過熱ぎみなので抑制するのだ  
ということですけども、利上げによって、景気は少し下降ぎみになるだろうという感  
じです。日米の経済が今、同調して景気回復サイクルにあるとすれば、来年の前半ぐら  
いから、このサイクルが共に下降ぎみになるのではないかと思えます。アメリカの場合  
には既に個人消費だとか住宅建設などに陰りが見えてきておりますので、選挙が終われ  
ば、下降傾向がはっきりしてくるとというのが一般的な見方です。

## 日本の財政赤字とアメリカの双子の赤字

こうした短期的な景気のサイクルとは別に、日米は長期的な大きい課題を抱えていま  
す。日本は財政赤字の問題であり、アメリカは双子の赤字の問題です。

日本の財政赤字に関連して、大場智満氏（元財務官）さんの『世界ビジネスジョーク  
集』（中公新書）に、おもしろいジョークが出ていたのでご紹介します。アメリカの大  
統領が神様をお願いをして、アメリカの長期的な課題であるパレスチナ・イスラエル問  
題を解決してほしいと頼んだ。すると神様が「よし、わかった、その願いをかなえてや  
ろう。ただし、おまえの任期中には無理だよ」と答えたそうです。アメリカの大統領は、  
まあブッシュさんということでしょうけれども、ちょっとがっかりして帰っていく。そ  
こに韓国の大統領がやってきて、「南北の統一をしてほしい」と神様に頼むと。神様が  
「よし、わかった、かなえてやろう。ただし、おまえの任期中には無理だよ」と同じよ  
うに答えた。これで韓国の盧武鉉ノムヒョン大統領も喜び半分、失望半分で帰る。そこに日本の首  
相がやってきて、「財政赤字を解決してほしい」と神様に頼むと、神様は「よし、わ  
かった、かなえてやろう。」「こゝまでは前のふたりと同じだったのですが、「ただし、私  
の任期中には無理だよ」と答えた、という話です。神様の任期中かどうかわかりません

が、財政赤字の解消は、非常に長期的な課題だということだと思います。

この間、私の同僚が岡山へ出張で行ったら、店先の張り紙で「二千円札と交換します」というのが書いてあるので何だろうと尋ねたら、「二千円札は新しくできたお札だから、これから新しいお札が発行されても通用する」ということで、その背景には、他のお札は新しいお札に切りかわると通用しなくなるという噂があると言っ。

その話を聞いたとき、随分ばかな話があるねと言っていたのですけれども、この間、福井日銀総裁が記者会見で、「新札が出ますが、古いお札も使えます」ということをわざわざ言いました。日銀総裁が記者会見でわざわざお札が使えますと言っるのは、日銀の支店を含めていろんなところに問い合わせがあるということなのでしょう。日銀のOBという肩書の方が「預金封鎖」というような本を出していることもあるでしょうし、戦争直後の新円切り替えに伴う預金封鎖で、預金からの引き出しの上限が毎月三〇〇円と制限され、それ以上は引き出せなかったという歴史を思い起こす人もいるでしょう。お札が使えなくなるという恐怖心が出てきているのだと思います。

日本の国債の発行残高は七〇〇兆円を超え、GNP比も一四〇%で先進国の中で一番高いと言われています。ほとんど国内で蓄えられており、いわばお父さんとお母さんがお金を貸し合っているようなものだから心配はないということも言われますが、財政規律とか健全性を考えていくと、やっぱり非常に苦しいと思います。今、政府はプライマリーバランスを二〇一〇年にとるということを公約に掲げています。借金の返済は別に、収入と支出をそろえるということですが、その公約を達成するのも非常に難しい状態だと思います。

私どもの論説委員の中には、客員として小林慶一郎さんという通産省のエコノミストがおり、彼も含めて財政の議論をよくするのですけれど、どうやって七〇〇兆円を返すのかという話になると、良い回答が出てこない。ソフトランディングできるのかと問うと、非常に難しく、やはりどこかでハードランディングするんじゃないかとみんなが言っんです。超インフレになったら、財政だけは解決するのですけれども、それは副作用が大きい。名目で五%とか七%とかいうような「リフレーション」になれば、解決の

めどは見えてくる、つまりソフトランディングになると思っていますが、今のところはそういう芽も見えないということです。

そうすると、やれ預金封鎖だとか新円切りかえだとかが話題になる中で、あり得ないことに思えるのですが、ハードランディングがどこかで起きるんじゃないかと思うのは仕方がないということかなと思います。中長期的な問題として、これから財政赤字の問題はますます重くなっていくだろうと思います。金利がそろそろ上がり始めていますが、このまま上がっていくと、この七〇〇兆円が財政に響いてくるでしょうし、資本逃避とどうか海外に出て行く可能性も出てくるでしょう。こうした危険を常に日本は背負っているように思います。

アメリカの場合も、ITバブルの崩壊で財政収入が落ち、それが財政赤字を広げています。そして、そこに、さらに福祉・医療への費用の増大と軍事費の負担がのしかかっています。アメリカも日本と同じようにベビーブーマーの世代がそろそろ引退の時期に差しかかっており、今後、中長期的に財政赤字が増えると思います。財政赤字とともに貿易赤字も多いという双子の赤字の問題は解消されそうにないと思います。日米双方が赤字の問題をこれからも引きずっていくだろうと思います。

従って、中長期的には明らかにドルは減価せざるを得ないだろうと思います。日米で比較したときには、つまり日本の抱えている問題とアメリカの抱えている問題について、その駄目さ加減を比較したときには、果たしてどっちが駄目かは定かではなく、円高に進むとは断言できないけれども、少なくともドル安の傾向が続くのは間違いないように思います。

## 高まる中国の存在感

世界経済を考えるうえで、中国の動向を無視することはできません。中国は、このところ政治的にも経済的にも存在感を増しています。経済的には、今やアメリカと並んで世界経済の牽引車になっており、特にアジア経済の中では非常に強い力を持つてきていると思います。

先ほどお話しした、オーストラリアに行ったときには中国の記者も一緒にいました。この中国の記者が、いろんな経済団体とか経済閣僚に会ったときに、質問すると、相手が身を乗り出して質問を聞き、丁寧に答えるのです。この間、マレーシアにも行ったのですが、やはり一緒にいた中国の記者が質問すると、相手が一生懸命に答えるのです。いかに自分のマーケット、オーストラリアならオーストラリア、あるいはマレーシアならマレーシアが大きなマーケットがあるかということ、それから自分たちの製品がいか

に中国にとって有効かということを生懸命説明するのです。

十数年前のことになります。私は一九八七年から一九九〇年にかけて、アメリカに勤務していたのですが、そのときにアメリカの取材先が日本の記者だというと、やはり身を乗り出してきたものです。会いたいと言うとすぐに会ってくれるし、いかに日本に自分売り込む、あるいは自分の組織を売り込む、自分の会社を売り込む、アメリカを売り込むということを一生懸命にやっております、取材がしやすかったのですけれども、それと非常によく似ている感じがします。

ちょっと中国への過大期待があるように思いましたけれど、それだけ中国の魅力、特にマーケットの魅力というのにみんなが気付き始めているように思います。うらやましいという感じと、本当にうまく行くのだろうかという気持ちが半々ですけれども、少なくともみんなが今、中国に対して非常にマーケットとして興味を持っていることは確かだと思えます。

経済だけではなくて、経済を背景に、政治的にも今、中国は驚くほど強くなってきています。例えばG7と呼ばれる財務大臣・中央銀行総裁会議だとか、G8と呼ばれる先進国首脳会議（サミット）などに対しては、これまで中国は「我々は途上国だからそんなところは相手にしません」と言ってきたのですけれども、中国が加わっても良いというような秋波はつよぎを送るようになっていました。先進国側にも、中国が入っていないと話にならないというので、いらっしやい、いらっしやいという雰囲気を出してきています。中国は変わってきています。革命四世代の胡錦濤・温家宝時代になって、毛沢東、鄧小平、江沢民の次の世代ということですが、経済的なパワーがついてきたという自信が政治的なパワーの自覚ということが変わってきているのかと思えます。



経済的には、ものすごく勢いがあるということはよくわかるのですけれども、政治的にも随分変わってきていると思います。それは、例えば、ASEAN（東南アジア諸国連合）に対して、中国側から自由貿易協定（FTA）を締結しようと声をかける形で現に進み始めているということでも明かです。これを見て日本も慌てて動き始めていますが、外交的には遅れをとっています。

それから、あまり目立っていないのですが、中国とインドとの関係修復も非常に進んでいます。中国とインドは、ご承知のように国境をめぐる戦争をやったりして緊張関係が続いていたのですが、国境問題を解決し、関係を修復してこうという動きが昨年ぐらいから出ています。中国の戦略は、インドと組めば、政治的にも経済的にも相当なことができる、特にIT分野でいろんなことができるという思惑だと思います。

さらに北朝鮮をめぐる六者協議です。初めのうちは、北朝鮮に関係の深いロシアや中国を巻き込んでいけば、少しは北朝鮮も変化するだろうというのがアメリカの認識だったと思いますけれども、今はもうアメリカの国務省の幹部らが「中国という存在がないと、北朝鮮は動かない」「北朝鮮問題のかぎを握っているのは中国だ」というようなことを平気で言い始めています。今まで考えられなかったことで、それだけ中国の政治力が強くなっていると思います。

これまでの日本のアジア戦略では、中国がどんどん台頭してくる、あるいは中国が積極的に前に出てくるということとは考慮されていなかったと思いますが、これからは、中国の戦略を意識することが重要になると思います。日本にとっての試練ですが、積極的なアジア戦略を取らざるを得なくなるでしょう。しかし、今はまだそこまで動けないというのが日本の実情だと思います。ご承知のように、今、小泉さんは中国に行けないという問題もありますけれども、それだけでなく、中国の対ASEAN、そして対アメリカなどに対する攻勢に比べて、日本がちょっと守勢に回っていると感じます。

## ニュースキャスターとコメンテーター

こうしたことを考えると、仲間内の話で恐縮なのですが、「報道ステーション」とい

う「ニュースステーション」の後の番組に出ている加藤千洋編集委員は中国の専門記者で、彼のような人物をコメンテーターに起用したのは、非常にいい選択だと思います。

私もかつて「ニュースステーション」のコメンテーターをしていたので、若干「報道ステーション」の話をする、古舘氏が少し無理をしているように見えます。ニュースの原稿を読むというよりは、その内容を頭の中で咀嚼そしゃくして、視聴者にかみ砕いて説明しようという意欲は良いのですが、ちょっと意欲が溢れ過ぎている感があります。「ニュースステーション」の久米さんは、何か勝手なことを言っていたというように思われていますが、実は久米さんは、ほとんど自分の意見を言っていなかったのです。ニュースの冒頭のところで何か皮肉っぽいことをポンと言ってからニュースを読み始めるのですが、あれは記者が書いた原稿で、久米さん個人のコメントというのは、ニュース原稿を読み終わった後にチヨコチヨコツと言っ、そのチヨコチヨコツとが時々問題になりましたが、それだけでしかないのです。

つまり、ニュースキャスターといっても、恐らく一日にせいぜい一分か二分ぐらいしか自分の言葉を発していなくて、その横にいるコメンテーターが多分一日で長くて三分短くて一分か二分ぐらいコメントをしているだけということです。その辺の事情を考えると、久米さんよりむしろ古舘さんの方が自分の言葉で喋っていると思います。

ところで、アメリカのニュースキャスターは中立で、ほとんど自分の意見を言いません。それでは、どうしてアメリカのニュースキャスターというのは人気があつて、世論を変えていくようになるのかというと、コメントはできるだけ抑えるけれども、表情、仕草、言葉遣いなどによって、ああ、この人はこれが嫌いなんだとか、これは良くないと思っているんだということを匂わせるからだという。こういうテクニクに非常にたけているのです。

一方、ヨーロッパでは、ニュースキャスターが好き勝手なことを言っという国が多いそうです。「ニュースステーション」という番組を作るときには、米国と欧州の両方のスタイルを懸命に研究したうえで、結論を言っ、かなりヨーロッパ型の、つまりニュースキャスターも意見を言っ良いということにしたのだそうです。それでもコメ

ンテーターを横に置いて主にコメンテーターに意見を言わせるということで、一種の自制を働かせることにしたのだそうです。

筑紫哲也さんの「NEWS23」でも、筑紫さんは意見を言うときには、ニュース解説とは別に「多事争論」というコーナーで行っています。あれもニュースキャスターと意見を言うのを分けるという工夫をしているのだと思います。古舘さんは、その辺をもっと前進させようとしているのでしょうが、それで、ある意味ではリスクが大きくなっているのかもしれない。まあ横にいるコメンテーターが、私よりはずっと人格的にも、知識力でもすぐれた人間で、特に中国に関しては天下一品の「通」だということでご覧になった際には、そういう目で見ていただければと思います。

## アメリカの大統領選挙

アメリカの大統領選挙の話します。今年の一月末から二月にかけてアメリカのニューハンプシャー州の予備選挙を見てきました。アメリカの選挙は非常に長丁場で、選挙の年の初めにアイオワ州で開く党員集会、ニューハンプシャー州で開く予備選挙を皮切りに、各州で予備選あるいは党員集会で、党大会で大統領候補を決めるための「代議員」を選出していくんです。それで、州ごとに代議員を決めていって、党大会ということになります。今回は民主党がボストン、共和党がニューヨークです。

予備選に入る前には、ディーン氏が優勢だといわれていたのですが、最初のアイオワ州の党員集会で、ケリー氏がトップとなり、みんなはびっくりした。ディーンさんはトップにならなかったうえに、わめいたという場面がテレビで何度も流されたことで、私がニューハンプシャー州に行ったときには、そのショックから立ち直れずにいて、同州でもケリーがとるという結果になりました。今回は混戦だといわれていたのが、実際にはアイオワとニューハンプシャーで、ケリー氏に決まったということになりました。

ケリー氏も副大統領候補になったエドワーズ氏も上院議員で、ワシントンで接する機会もあったと思うのですが、私はどちらも身近で見たことはありませんでした。民主党の候補者の中でいえば、ゲッパード下院議員は昔から対日強硬派でしたから、よく取材

をしましたし、NATO司令官だったクラーク氏が出てきたりして、ニューハンプシャーには是非行きたいと思っていました。それぞれの候補者がどんな人間か一番の興味があったものですので……。

意外だったのはケリーさんですね。中年のやつれたおっさんという印象があったのですが、実際にも、実際に会って、間近で見ていると、話をしたわけではないのですが、周りの人と話すのを横で見たりして感じた雰囲気は、とても良いものでした。一種の威厳さを持っている人だと思いました。テレビで見た印象には全然そういうものがないので、その雰囲気は、多分、目の前で見ないとわからないだろうと思います。そういう意味で、ケリーさんが一生懸命に全国を回っても、2億人の国民に会えるわけではないので、理解されないのではないかという気がします。

エドワーズさんというのは、四九歳ですが、年よりもずっと若く見える人で、私の同僚は「あれはアメリカの森田健作ですよ」と言っていました。森田健作さんがどういうイメージがわかりませんが、若いということと、そのためにちょっと上滑りのような感じというのが私の印象でした。ディーンさんというのは意外にしっかりしていました。デラウェア州知事でしたから、外交問題よりも内政問題を喋っていたときに非常にしっかりして、まともだと思いました。しかし、エドワーズ氏とディーン氏とケリー氏を比べると、やっぱりケリー氏が器としては一番で、この三人の中では最も大統領にふさわしいという感じを持ちました。

その後ワシントンに行って、大統領選挙戦の行方をいろいろな人から聞きました。共和党の人たちの中には、厳しい戦いで、ブッシュが負けるかもしれないという人もいました。民主党の人たちは、逆に、「今賭けるなら、おれはブッシュに賭ける」という人が多かった。やっぱり実力というか、最後の勝負になったら、現職のブッシュが強いと言っていました。それが二月時点の状況だったのですけれど、この七月にワシントンのシンクタンクにいる研究者が来日したときに聞いたなら、「4月までだったらブッシュに賭けたけれども、今ならケリーに賭ける」と言っていました。少なくともワシントンの雰囲気は変わってきているようです。

何でワシントンは変わったのかと聞いたら、「ワシントンは、ものを論理的に考えるところだ」と言うのです。確かに論理的に、今のイラク問題、財政問題を考えると、ケリーの方が強いという要素が出てきていると思います。ただ、アメリカは広く、ワシントンの雰囲気というのはちょうど日本の永田町、霞が関みたいなものです。「永田町の常識は日本の非常識」と言うように、ワシントンの常識とアメリカの常識とは随分違うところがあるので、私はまだ少しブッシュの方が強いと実は思っています。

ブッシュの強さというのは、何といっても現役であることです。大統領は二選目までは立候補できるのですが、三選は禁止されています。二期やった大統領の後の選挙は、共和党の新人と民主党の新人の争いとなり、二〇〇〇年のブッシュ対ゴアの選挙もそうですが、その時にはどっちの政策が良いのか、あるいはどっちの人柄が良いのかということが大きな争点になります。しかし、今度のブッシュ氏にすれば二選目の選挙は、そういう選び方ではなく、ブッシュ氏の信任投票という色彩の強いものです。信任投票でバツを付けるようにする人は、本当にこの人では駄目なのか、どうしても取り替えなければ駄目なのかという問いを迫られるわけです。ブッシュとケリーのどっちが良いと聞いているのではないというところは、現役には非常に有利だと思えます。

そういう意味で二期目の大統領は選挙で非常に強く、最近の歴史で言うと、二期目で失敗したのは民主党のカーター大統領、そしてブッシュのお父さんぐらいで、いずれも非常に景気の悪い時の選挙でした。今回の場合、経済は回復期にあるということを考えれば、景気もブッシュ氏の強みになっているだろうと思えます。

ブッシュ氏の弱みは何かというと、やっぱりイラクの問題です。ただ、日本で考えているのとちょっと違うと思います。イラク問題では明らかに政策運営（ハンドリング）を失敗していると国民は考えているという結果が世論調査で出ています。しかし、その一方で、九・一一を体験したアメリカ国民にとっては、それ以降は大きなテロがアメリカ国内で起きていないということ、「テロからアメリカ国民を守っていますか」という質問に対しては、ブッシュ大統領は守ってくれているという答えの方が多いのです。この点についてはブッシュ氏に対する信頼があるのです。

それなら、これからテロが起きたらどうなるかということ、「だからもつとブッシュさんにやってもらわなければ困る」といつぶつに反応するのか、「やはりブッシュさんじゃ駄目じゃないか、ケリーさんだ」となるのか、それはわからないのですけれども、現時点では、アメリカ国内で九・一一以降はテロが起きておらず、そのためアメリカ国民をテロから守っているという評価は非常に高いのです。

我々から見ると、あんなにイラクのハンドリングを失敗しているので、「外交政策ではブッシュはだめだ」、「イラク問題ではブッシュはだめだ」というふうに思えるのですけれども、もう一方の安全という問題が入ってくると、評価が変わってくるということです。ですから経済とイラクとで、経済はブッシュ氏が有利だけれども、イラク問題ではケリー氏が有利であり、そのどっちだろうかという設問だけでは大統領選挙の行方を見誤ると思います。もう一つ、アメリカ国内の安全という問題があつて、実はその問題ではブッシュ氏への支持の方はまだある。イラク・経済ではなくて、イラク・経済・安全という三つの問題をアメリカは抱えており、最後の問題になると、まだまだブッシュ氏への支持が高いということです。

## キャラクター・イシュー

わからないのは「キャラクター・イシュー」と呼ばれる候補者の人格的な問題です。ブッシュ氏は就任当初、国民のなかで、語彙が貧困だとか、言葉の使い方がおかしいとか、本を読んでいないとか、親近感も含めて、馬鹿にされていました。ハーバードのビジネススクールを卒業しているのは米国の大統領で初めてですから、高学歴と言つても良いのですが、そちらよりも人なつっこいという人格というか人柄が評価されていたと思います。ところが、九・一一以降はアメリカ統合の象徴として、「テロとの戦い」を率先する指導者として見直されてきていると思います。

一方のケリー氏ですが、先ほどお話ししたように、何となくしょぼくれているのですけれども、よくよく見ると、スルメじゃないですけれども、なかなか味わいのある人間だということ、この「キャラクター・イシュー」、人格問題では、国民の選択がどっちに向かうのか興味があるところです。ケリー氏は七月末の党大会で、大統領候補とし

ての指名を受けた後、受諾演説をすることになっています。これは全米が注視する中でケリー氏の最初の、本当に最初の演説であり、この演説をいかにうまくやるかということが大事だと思います。さらに九月に入ってからテレビ討論が重要です。これは九月末から十月にかけて、大統領候補同士で二回、副大統領候補同士（エドワード対 Cheney）で一回行われ、このテレビ討論で植え付けられるイメージが選挙を左右する大きい要素になると思います。

私が見た中で言うと、例えば前回の民主党の党大会で指名を受けたゴアさんは奥さんのティツパーと長いキスをしました。普通の儀礼的なキスじゃないのです。アメリカ人もびっくりというのをやったのですけれども、あれは明らかにクリントン・スキヤンダルの影響で、不倫問題が批判され、もう民主党は嫌だという層に対して、自分は奥さんをいかに愛しているか、家族をいかに愛しているかということを強調しようとしたパフォーマンスだったと思います。一方、その二週間ほど前の共和党の大会で、ブッシュ氏は受諾演説で奥さんを褒めたたえました。やっぱり妻があつての私だということを言つたのです。そういう意味では、前回は、お互いに夫婦愛を競うということが人格的に評価されるという競争だったと言えると思います。今回の場合は、多分、夫婦愛ではないと思いますが……。

それからテレビ討論で一番有名なのは、もう伝説になっていますけれども、アメリカで初めてのテレビ討論、一九六〇年のニクソン対ケネディーのものでしょう。その時、ラジオを聞いていた人はニクソンが勝つたと思い、テレビを見ていた人はケネディーが勝つたと思つたと言われています。テレビのイメージでは、若々しいケネディーが鮮明だったということです。

ただ、これには裏があるようです。ケネディーのお父さんというのは密造酒で儲けて駐英大使になつた人物で、マフィアと関係を持つ、いわば成り上がり的な人物で、メディアにも随分影響力を持っていたという。そしてテレビ討論のとき、ニクソンが足を痛めていたのを知って座るのではなく、立ってやるようにし向けたという。ニクソンは、そのため苦痛に顔をゆがめる表情を出したのだということです。さらにニクソンは髭を十分にそつていなかったそうで、意図的にそこをアップにするなどの演出効果もあつたと

いったことが伝えられています。ともかく、テレビで見ている側は、二人の年は四つしか離れていなかったのですけれども、ケネディーがとて若々しく見えた。というわけで、テレビの大統領選挙に与える影響力が大きいということが証明された「事件」ということになっています。

私が見たのでは、共和党がブッシュのお父さん（当時副大統領）、民主党がデユカキスさん（当時マサチューセッツ州知事）の選挙のテレビで、司会はCNNのキャスター（バーナード・シヨ）です。司会役が二人にいろいろ質問をぶつける。デユカキスさんに対しては、リベラルな立場の人で死刑制度には反対だということで、「あなたの奥さんがレイプされて殺されたとしても、それでもあなたは死刑を求めないのですか」という質問がなされた。デユカキスさんは、それでも死刑制度には反対すると、冷静に答えたのですけれど、結果的に言っていると、あまりにも冷静すぎたので、「奥さんを殺されてもあんなに冷静な奴はクール過ぎる」、「冷たい奴だ」という評価になってしまったということがあります。

一方、その時、ブッシュさんには何を聞いたかということ、「あなたが当選してすぐ死ぬと、副大統領が大統領になりますか、それでも良いのですか」と聞いたのです。このときの副大統領候補はクエールという人（当時上院議員）で、どこかの小学校へ行って子どもが「ポテト」という言葉を黒板に書いたら、そのスペルは違うよと言って自分が黒板に行つて書き直したところ、そのスペルも間違っていたもので、「ポテト」も書けない人と言われていたのです。

クエール氏にとっては、これは致命的なミスでした。いまだにアメリカ人は「クエール」と聞いた瞬間、ああ、ポテトのスペルを書けない奴だと言つのです。真相はフランス語のスペルを書いてしまったということのようで、お気の毒です。最近よく日本に來られ、何度かお会いしたのですが、とても知的な方です。

ひどいジョークがあつて、「あなたが牢獄に捕らえられたときに、同じ部屋にリビアのカダフィー、イラクのフセイン、キューバのカストロなど米国にとってのならず者とブッシュとクエールがいる。あなたはピストルを持っていて、ピストルには弾が一発



入っている。あなたは、どうするか」というものです。答えは「クエールを撃つ」。

アメリカは大統領が死ぬと副大統領が自動的に大統領になるため、「ポテト事件」以来、この人だけは大統領にしたくないという一つのコンセンサスが生まれ、「クエールを撃つ」という悪い冗談ができてしまったのです。しかも、この冗談には「それならピストルに二発の弾が入っていたら、どうするか」という後段があって、答えは「二度クエールを撃つ」というのです。確実に殺すということでしょう。

## 現在のホワイトハウスの内実

ところで、クエールさんはブッシュ家に親しいというか近いので、ホワイトハウスの内実などをよく聞きます。例えば、ライス補佐官とブッシュ大統領との関係は、どうなっているのかと聞いたことがあります。というのは、ライスさんの存在感がないように見えたからです。大統領補佐官というのは、ケネディー政権のブレジンスキー、ニクソン政権のキッシンジャー、レーガン政権のベーカー、ブッシュ政権のスコウクロフト、クリントン政権のサンディ・バーガーなどレベルの高い戦略家が多い。その中でもすごいのが、パワーゲームの神様みたいなキッシンジャーです。

しかし、ライスさんには、そういう印象がないのです。それで何をしているのかとクエールさんに尋ねたのですけれど、答えは、ライスさんは、会議では、ほとんど喋らず、会議後、ブッシュ大統領が「あの議論は一体どういう意味だ」と聞くと、あれはこういう背景があって、こうなって、こうなった、という説明をする。つまり、大統領の「家庭教師」だというものでした。つまりブッシュ政権は、大統領補佐官がリードして何かをやるというようにはなっていないということです。今の政権は「ブッシュ大統領、 Cheney 首相」と言われていますけれど、事実、Cheney 氏が相当の力を握っているということがクエールさんの答えから類推されます。

さらにクエールさんに「ブッシュ氏の何が問題だ」と尋ねたところ、「国際的経験があまりにも少な過ぎる」と言いました。確かにブッシュさんは、大統領前の国外旅行の経験も異常と言えるほど少ない。お父さんが米国の北京事務所長のときに、羽田に

ちょっと寄って北京に一回行ったというのが唯一のアジア旅行で、ヨーロッパもほとんど行ってない。良く行くのはメキシコくらいということでした。

もつとも、最近、クエールさんに会ったときには、「ブツシュ氏もたいぶ国際経験を積んだから、もう大丈夫だ」と言っていました。しかし、今度のイラク戦争なんかでも、国際的な経験のなさが出ているように思います。つまり、外国人を知らないから、本能的に外国人は怖いんだという感じがあるように思います。どのように対応して良いのかも、よくわからないのだからうと思います。

### 大統領選挙とイラク問題

選挙の話に戻りますが、イラク問題がどのくらい今度の選挙に関わってくるかということを考えてみたいと思います。世論調査では、経済よりもイラクの方が重要だという人たちが増えているので、相当にイラク問題が選挙に影響しそうだとは思うのですけれども、最後の決め手というほどには強くないという気がします。というのは、ベトナム戦争の末期では、週に百人くらい米兵が死んでいたのですけれど、今は週でいえば十人以下でしょう。ベトナム戦争当時とは大分、違い、兵士の死からくるインパクトは弱いという気がします。

しかし、今は昔と違って、兵士の死のインパクトは大きいことは確かです。昔の百人が今の十人と同じくらいだとも言われています。それでも近所の誰々さんが死んだと友達に誰々が死んだという感じでいうと、まだまだベトナム戦争の領域に達していないと言えると思います。つまり、問題であるということ、それが自分の身内の問題として捉えられるとの間にはギャップがあり、まだ現状では、申しわけないのですけれども、選挙で兵士の死が決定的な要素になるほどにはなっていないと思います。九・一一の恐怖心に比べて、私はまだまだ兵士の死が選挙を左右する決定的な要因になるほどではないように思います。

とは言っても、このところ州兵と予備役を使うようになってきているのは問題だと思いません。アメリカの兵士は、昔は二百万人いましたけれども、今は百数十万人にまでに減っ

てきています。イラクに展開しているのは十三万八千人、およそ十四万人ですけれども、その派兵が難しくなっているのです。一つにはアフガンを含めていろいろなところに展開しているからです。

日本の自衛隊は三カ月交代ですけれども、アメリカは一年交代のローテーションを組もうとしました。しかし、それでもなかなか難しく、一年を少し延ばしたりしたため、ますます兵士の不満が高まり、それでやむなく州兵と予備役を投入し始めたのです。州兵というのはもともと戦場に行くつもりがない人たちです。今のブッシュ大統領が批判されていることの一つに、ベトナム戦争の時、テキサスの州兵に志願したことがあるのもそのためです。州の空軍に入って、アラバマ州で訓練をしていた時に、酒ばかり飲んで、ほとんどその訓練に出なかつたと言われています。州兵に出たことで、ベトナム戦争から逃げたと批判されているのです。州兵というのは戦場から逃げるための材料に使われるぐらい弱いものなのです。

覚えていらつしやるかもしれませんが、昔「ランボー」という映画がありました。シルベスタ・スタローンの演ずるランボーがベトナムでグリーンベレーとして活躍して帰ってきたものの、米国社会とうまく適応することができない。拳げ句の果てに山の中へ逃げる羽目になる。そのランボーを大部隊で捕まえようとする。しかし、捕まえられない。その捕まえる側になつたのが州兵です。最後にグリーンベレーでランボーの上官だった人物が登場する。そして州兵の人に「君らが束になってかかっても、あのランボー一人を捕まえることができないよ」と言うのです。「おまえら州兵なんか、グリーンベレーの相手じゃない」というのです。米国社会の中で、州兵がいかに馬鹿にされているかがわかります。映画では、州兵たちは、ランボーにけ散らされて勝負になりません。その州兵が今、イラクの前線に送り込まれて、実際に死んでいるのです。送り出される者も、その家族も大きなショックだろうと思います。

予備役も同じようなものです。前線に行くことにはないと思って志願したものの、今は前線に送られ、死傷者も出ています。アブ・グライブという収容所で、捕虜の首に紐をつけて歩いている小さな女兵士の写真が出ましたけれど、あの子も予備役です。彼女はウエストバージニア州の田舎で、トレーラーハウスと言う車輪のないトレーラーが家の

子ですから、相当の下層社会の人です。高校を卒業して働き、その後、結婚して離婚する。それから大学に入り直し、もう一度頑張ろうとし、その資金稼ぎのために予備役のところマルをつけたら、前線に連れていかれ、結果として軍法会議にかけられる羽目になったのだという。

もちろん捕虜の虐待は許されることではないのだけれども、予備役の団体が事態はどうなっているのだと動きました。彼女に罪があるのではなくて、上の方に問題があるのではないかと言うのです。予備役の前線への投入は、きちんとした訓練を受けていない者の投入という問題を含め、周囲の人たちが動揺するという要素を含んでいるのです。

そういう意味で、州兵・予備役がイラクに派兵されるようになっていくことは、選挙レベルにも、その影響が及ぶ状況にあるという気がします。

## ブッシュ対ケリー

時間もないので急ぎますが、ケリーさんの弱点としては、ユダヤ問題が上げられます。ケリーさんの父方のお婆さんはユダヤ人です。ユダヤ教からカソリックに改宗はいますけれど、それは一種の隠れユダヤみたいな話です。改宗をしていたので、ケリーさん自身は、そのことをよく知らなかったと言っています。しかし、ケリーさんは実は自身も隠れユダヤ教徒だと語ったなどの話もある。それがインターネットなどを通じて流れています。特に南部の方では、ユダヤ人と言うと、見たことはないし、何か新しい恐ろしい陰謀を企てるのではないかなど東部とは全然違う反応が厳然として存在しています。ケリーさんの人気が伸び悩んでいる背景にはユダヤ問題もありそうです。

人種問題は極めてセンシティブなため、このことは大きなメディアではほとんど取り上げられてはいませんが、インターネットや口コミでは流れおり、結構、大きな問題になっているように思います。

それからもう一つ、ケリーさんの人気が上がらない理由として、ケリーさんの政策自身がブッシュさんの言っていることとほとんど変わらないという問題もあります。ケ

リーさんは、初めのうちはブッシュさんのやり方はけしからん、つまりもっと国際的な協調を一生懸命やるべきだということ saying していた。しかし、今、ブッシュ大統領は国際協調路線に歩み寄り、国連の決議が必要だと言っており、その点での対立点はハッキリしなくなっている。

ケリーさんがすぐにイラクから撤退するとか、あの戦争は間違っていたとか言えば、違いがハッキリするのですけれども、そうは言わない。イラクがうまく行っていないにもかかわらず、ケリー人気が上がらないのも、一つにはそのためだと思います。

それでは明確にディーンさんが言っていたように、「撤退」を口にすれば良いかという、私は必ずしもそうは思いません。アメリカ国民の意識としては、イラクの状況は直ちに撤退というほどのものではないということもありますし、戦争をやっている最中に、戦場に兵士を送っている時に、それを否定するようなことは、対立候補であっても言わない方が良くという一種の哲学もあります。ケリーさんはそういうところも考えているのだと思います。

党大会では、候補者だけではなく、プラットフォームという党の綱領も決定されます。衆院選挙で、小泉さんは自分の言うことがマニフェストだなどと言っていましたけれど、アメリカの場合は民主党も共和党も、予備選の段階から、各地区・州の大会でプラットフォームを積み上げ、それを党大会で承認するという手順を踏んでいます。ですから、「近所にシカがたくさん出るようになったので、シカをもっと撃ち殺しても良いという許可がほしい」などというもので綱領として上げられています。

こうした手順で党綱領が作成されるのですけれど、ともかく、今回の民主党の党綱領を見て、まるでもう共和党と同じではないかと私は思いました。国民をどうやってテロから守るか、アメリカをどうやって軍事的に強くするかなんてというのが綱領にあるからです。こうした点では、アメリカの幅というか、共和党の幅と民主党の幅が非常に狭いところにあると思います。共和党はネオコンで、民主党はリベラルで平和的というようなことが言われますけれども、実はその差異は非常に狭い範囲内のもので、私にはほとんど変わらないように思えます。

ということ、大統領選挙はどっちだというと、私の見方は、まだブッシュが強いというものです。ただ、どっちが世界のために良いかと言ったら、明らかにブッシュさんは辞めた方が良く私は思いますけれども……。

## ブッシュの隠し球

この間、マレーシアへ行ったときには、十数人の各国の記者、学者、政治家と一緒になりました。そこでアメリカ批判を始めたら、もうみんな止まらない。ブッシュがいかに駄目かの大合唱でした。アメリカ人が一人いました。多分、民主党支持なのでしょう、何の反論もしません。そこで何か文句はないのかと言ったら、「毎日、もう言われっ放しですよ」なんて苦笑いをしていました。これだけアメリカが嫌われるのは歴史的になり、そのぐらいひどいように思います。

ドイツの記者と話したところ、ドイツは戦後の復興期にアメリカに助けられたので、中高年の人たちのアメリカ鼻根が強いのだそうです。ところがその人たちの間でも、あのイラク戦争はひどいということで、反米意識が出てきたと言っていました。ヨーロッパも、アラブ国家はもっとそうでしょうが、アメリカは本当に孤立していると思います。九・一一で、あれだけの同情を世界から集めたものの、アッという間に、その同情を失い、逆に嫌われるようになっており、その責任はブッシュ政権がかなり負うべきだろうと思います。そういう意味で、私は外交政策に限って言えば民主党政権になった方が良くと思います。

先ほど、ケリーとブッシュさんの両氏のイラク政策には、あまり違いがないと言いましたけれども、もし仮にケリーさんになったら、撤退の方針を明確に打ち出し、割合に早目にイラク問題を片づけるだろうと私は思っています。戦争をやっている最中には選挙戦ではあまり批判しないけれども、自分が政権をとったら、ガラリと意見を変えるというのが大体、アメリカの今までのやり方です。ですから、今、ケリーさんとブッシュさんの言っていることの大差はないので、変わっても大差はないだろうというのは、半分真実かもしれませんが、前任者がやったことはひっくり返すというのがもう一方の米国のやり方ですので、必ずしもそうではないように思います。

先日、USTR（通商代表部）の前日本部長のグレン・フクシマさんという日系三世の米国人に話をうかがいました。彼は民主党員だと思いますが、彼が言っていたのはケリーが勝つということです。その理由は非常に簡単で、「前回の選挙でゴアに入れた人はみんながゴアに入れるが、前回の選挙でブッシュに入れた人は、もうブッシュじゃ嫌だと言っている人がたくさん出てくる」ということでした。

前回の大統領選挙では、「第三の男」がいました。消費者運動の旗手のラルフ・ネーダーさんです。彼は三%ぐらいの票を取りました。三%というのは、ごく僅かなのですけれども、フロリダで実は十万票ほど取りました。ご承知のようにフロリダでは、ゴアさんはブッシュさんに接戦の末に負けています。それがブッシュ大統領誕生の鍵になりました。従って、ネーダーさんがどれだけ取れるかというのは、非常に大きな問題なのです。今回の選挙でも、世論調査で「ブッシュとケリーのどっちが良いですか」と聞くと、ケリーさんの方がちょっと上を行くことが多いのですけれども、「ケリー、ブッシュ、ネーダー」と三人を並べると、ネーダーさんが大体、三〇五%を取って、ブッシュさんとケリーさんが並んだり、ブッシュさんが有利になったりという状態になっています。つまり、依然として、このネーダー問題が重要だということです。

しかし、今回の大統領選挙では、ネーダーさんは緑の党という前回選挙の支持基盤になった党の支持を得られませんでした。従って、前回、ネーダーさんを支持した人たちが、「何としても今度はブッシュを落とさなきゃいけない」ということで、ケリーさんに回ることがあるかもしれません。

そういう計算をすると、ケリーさんが有利だと言えるのかもしれませんが、今回は共和党の党大会は共和党よりも一ヶ月遅い八月末から九月にかけてで、この一カ月の差が結構、大きく影響するように思います。党大会で指名を受けると、候補者は公営選挙に切り替えなければなりません。指名後は、それぞれ七千五百万ドル、八十億円ぐらいをもらって公的資金を使ってやることになります。選挙には、このお金しか使うことができません。となると、九月の指名までは自分の集めたお金で戦うことができるブッシュさんは、指名が遅い期間だけ、有利になると思います。

それから後、ブッシュさんは隠し玉をもう一つ持っていると思っています。それは、ご承知のように評判の悪い副大統領のチェイニーさんの扱いです。彼は心臓のバイパス手術を二度受けているので、ドクターストップがいつでもかかる状態にあります。従って、ブッシュさんがやる最後の手立ては、「ドクターストップでチェイニー氏が残念ながら出られなくなりました」と言って、人気のあるマケインさん、パウエルさん、ライスさんなどの人を副大統領に持つてくるウルトラCが残っていると私は思っています。もう時期的に言っているとギリギリですけれども、「ドクターストップ」と、奥さんが「駄目」と言う、この二つにはみんなアメリカ人は納得しますから、その可能性が残っているとと思います。

## 小泉政権の行方

最後に、日本の小泉さんの命運についてお話をします。永田町は嵐の前の静けさです。夏休みということもありますけれども、非常に静かです。誰も参院選敗北の責任問題を言わない。言えばみんな自分が傷つくということもありますけれども、九月に予想される内閣改造の人事問題をみんなが睨んでいるからだと思います。自民党のいわゆる守旧派と言われる人たちを含め、人事に傾注している状態で、その人事に不満が大きく残るようなことになれば、小泉打倒の動きは自民党内で強まるのでしようし、そうでなければ、生き残るということでしょう。

既に国民的な人気が相当落ちているということと、「人気のない小泉とは一体、何なんだ」という意見が党内で、じわじわと出てきています。しかし、代わりの人がいないということと、ぐずぐずしている。その結果、人事で様子を見ようということになってるのでしよう、この改造人事が不満をどれだけ解消できるかが鍵を握っています。

逆に言うと、自民党内の不安が収まるような形の人事が今度の内閣改造で行われると、いうことは、小泉さんの言っている、いわゆる改革路線はほとんど遂行できないということになるわけであり、そうすると、今度は、そのことがますます国民的な支持を下げていく要素になるだろーと思えます。自民党内の融和を図れば、国民的な支持率は下がるし、突っぱれば、自民党内でのパワーがますます弱まるという動きのとれない状況に



なっていると思います。今回の参議院選挙で負けたけれども、三年後までは参議院選挙はない、そして衆議院の解散も途中でやらないとすれば後、三年あり、超長期政権になるという声がある一方で、もうもたないという意見もあります。

それにしても、小泉さんというのは、非常に不思議な人で、本当にワンフレーズなのです。首相との懇談に出た記者が言っていました。例えば、郵貯改革はどうなっているのですかと質問をしても、具体的な答えはないそうです。本当に「改革」の一言だけ。それなら、郵貯改革、郵貯改革と言っても意味がないと思うのですけれども……。

アメリカの記者会見は二問二答で、「大統領」って手を挙げて質問し、大統領が答える時に、記者は立ったままです。一度答えると、記者は自動的にもう一回フォローアップします。そして二問目には記者が座るとというのが通常のやり方です。日本は大体一問一答が多く、誰が質問して当たり障りのない答えで終わってしまうのだと思います。もっとも小泉さんの場合には、七問七答でも八問八答でも、意味ある答えは返ってこないのではないでしょうが。

本当にワンフレーズと言うのか、何と言って良いのか、本音がないような人で、宮沢喜一さんなどと比べるともう全然違います。宮沢さんはいろんなバックグラウンドを説明したうえで、政治的にはこうだよ、というようなことを言うのですけれども、小泉さんは全くそういところのない人で、党内でも孤立しているといわれています。

時間になってしまいました。最期にもう一度まとめますと、景気は確かに上向いているものの、日米の双方とも政治のリーダーシップに大いに問題があり、ジャーナリストとして、その点を突いていこうと思っっている次第です。取りとめのない話で申し訳ありません。ありがとうございます。